

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探求コース (観光交流✕アジアコース)		訪問国	インドネシア	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	渡邊 芳	学年	3年

私がこの留学に挑戦した背景には、日本茶を取り巻く現状への問題意識があります。高校での活動を通して、日本ではお茶の消費量が年々減少し、それに伴って放棄茶園が増えている現状を知りました。実際に茶畑や生産者の方と関わる中で、「このままでは日本茶の文化そのものが衰退してしまうのではないか」という危機感を抱くようになりました。そこで私は、日本国内だけでなく海外にも目を向け、日本茶の新たな可能性を探りたいと考えるようになりました。留学先としてインドネシアを選んだ理由は、人口が多く経済成長が続いている点に加え、イスラーム教徒が多く宗教的理由からアルコールを飲まない人が多いため、嗜好飲料としてのお茶が生活に入り込みやすいと考えたからです。この留学では、「日本茶はインドネシアで受け入れられるのか」という問いを軸に、実際の生活や価値観の中でその可能性を確かめることを目的としました。

留学前、私は文献や事前調査を通してインドネシアの社会や文化について学びました。その中で、人口構成の若さや経済成長、宗教と生活習慣の関係性に注目しました。これらを踏まえ、私は「インドネシアでは、日本茶は健康的で新しい飲み物として受け入れられるのではないか」という仮説を立てました。特に、日本茶が持つ「健康」「伝統」「自然」といったイメージは、今後生活の質を重視する層にとって魅力になるのではないかと考えていました。一方で、味や飲み方、価格帯など、日本とは異なる文化の中でどのように受け止められるのかについては、実際に現地で確かめなければ分からない点も多く感じていました。

留学中は、現地の人々に日本茶を紹介し、実際に飲んでもらいながら意見を聞く活動を行いました。その中で強く感じたのは、日本茶そのものの味だけでなく、「どのように伝えるか」が評価に大きく影響するという事です。初めは「苦い」「飲み慣れない」といった反応もありましたが、淹れ方や日本でのお茶文化、健康面の特徴を説明すると、印象が大きく変わる場面が多くありました。



また、インドネシアでは甘い飲み物が好まれる傾向があるため、日本茶をそのままの形で広めることの難しさも実感しました。この経験から、海外で日本茶を広めるためには、日本の価値観をそのまま持ち込むのではなく、現地の生活や嗜好に寄り添う姿勢が重要であると学びました。

留学を通して得た答えは、「日本茶はインドネシアで受け入れられる可能性はあるが、そのためには文化的な工夫が不可欠である」というものです。留学前に想定していた人口や経済、宗教といった条件は確かに日本茶にとって追い風となりますが、それだけで自然に広まるわけではありませんでした。現地の人々の反応から、日本茶を広めるためには、味の調整や飲み方の工夫だけでなく、なぜ日本茶が特別なのかを分かりやすく伝えることが重要だと感じました。この点において、私は「商品売る」という視点だけでなく、「文化や背景を伝える」という視点の必要性を強く意識するようになりました。

帰国後に参加した浜松インドネシア祭りでの活動を通して、国や文化が違っても、「分かりやすく伝えること」「相手の背景を尊重すること」の重要性は共通していると改めて感じました。これは留学先だけでなく、今後日本で活動が続けていく上でも大きな学びとなっています。

